

触れ合う手

さおすけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

s a o生存者であるヴォルフこと真神^{まがみ} 葵^{あおい}は未だ囚われの身である、閃光アスナを救う為、黒の剣士キリトと共にALOの中へと飛び込む。

しかしそこで出会ったのは黒の剣士ではなく、とある闇妖精族の二人の少女だった。

彼女達と行動を共にする内に判明して行く彼女達が置かれている現状。

かつて茅場^{かやば} 晶彦^{あきひこ}が語った世界の法則を飛び越えて行ける意志の力とは何だったのか。

一闇妖精であるヴォルフは彼女達にどのような影響を与えて行くのか。

目次

闇妖精始めました	1
初めての飛行	8

闇妖精始めました

仮想世界での生活から離れ、既に二ヶ月が経過した。だが、未だ仮想空間に囚われ続けている三百人ものプレイヤー達。原因は不明で、今も尚、調査が行われている。

囚われている彼らに共通点はあらず、性別や容姿、年齢は関係がないとされている。

一部では茅場を疑う声もあつたが、それはその後、一瞬で消え去る事となった。なぜなら茅場の死体が発見されたからだ。

元々、仮想世界で生きてきた者たちに茅場を疑う者はいなかった。

全員が感じていた。あの男はそのような事をする男ではないと。

「……？」

横たわっていた体を起こそうとした瞬間、愛用しているパソコンから受信音が聞こえた。

数個、アドレスを所持しており、このアドレスは私的な事に使うアドレスなので、メールが来る事はそう無い筈なのだ。

「よっぽど親しくないと教えないんだけど……っ！」

差出人の名はエギルと書かれていた。

そして、画面を見た俺は自分の目を疑った。

そこに添付されていたのは、一枚の写真だった。

そこに写っているのは綺麗なブラウンの瞳に頭髪、雪のように白い肌をした少女の姿だった。

そう、俺はこの少女に似ている人物を知っている。

「アスナ……」

無意識に名前を呟きながら、メールの続きを読む。

画面をスクロールすると、地図を添付したメッセージが書かれていた。

場所は割と近場の台東区御徒町の裏通りで、地図によると、そこはバーのような所だという。

仮想世界での商人エギルは現実^{リアル}でも商売人だったのだ。しかしよくもまあ、あの面で接客業が出来るものだ。

あの巨漢が接客をしている状況だとすれば俺なら間違いなく逃げるだろう。

地図通りに進み、路地裏を抜けて行くと、一つの落ち着いた雰囲気
を醸し出している店を発見した。

《Dicey Cafe》。それが店の名前だった。それが目的地だと確認すると、俺は勢いよく扉を開けた。

扉を開ける軽快な音と店内の落ち着いた雰囲気ギャップに少し戸惑う。

「よう、ヴォルフ」

「…やめてくれ。現実だと死にたくなるからな。…俺の名前は真神葵だ」

「俺の本名はアンドリュー・ギルバート・ミルズだ。改めてよろしく、葵」

来店した俺を迎えたのは、ニヤリと笑う見慣れた禿頭の巨漢だった。

二年間使い続けていた名を訂正し、軽い自己紹介をする。勿論、性格などはお互い知っているので、本名だけの紹介だが。

エギルの言った、ヴォルフというのは仮想世界での俺の名前だ。この名前の由来は俺の本名にある。俺の本名は先程エギルに言った様に、真神 葵と言う。ヴォルフは神話上に真神という名の狼が存在する事から来ている。

「ところで、用件はなんだ？ からかう為に呼んだわけじゃないんだろ？」

「当たり前だ。お前は送った写真を見て来たんだろう。用件はそれだ」

「…あれは何処だ？」

「それはとあるゲームの中だ。そしてそれはプレイヤーが撮影した写真だ」

「ッ!!」

つまりアスナが目覚めない理由はそこにあるという事になる。

だが、何故ゲームの中なのだろうか。

SAO事件を巻き起こした茅場は既にこの世にはいない。なら、誰がそんな事をする事が出来るのか。

「で、そのゲームの名前は？」

「これだ」

カウンターの下から出されたのは長方形のパッケージだった。ゲームの名は《Alfheim Online》と書かれていた。これでアルヴヘイムと発音するらしい。そしてそこには《AmuSphere》^{アミュスフィア}なるロゴが印刷されていた。

アミュスフィアは俺たちが仮想世界に閉じ目込められている間に発売されたナーヴギアの後継者である新ハードだ。

事件を起こし、悪魔の機械とまで言われたナーヴギアだが、これまで夢見たフルダイブ型ゲームマシンの需要は計り知れず、何人たりともこれを禁止する事は不可能だった。今度こそ安全が保障されているアミュスフィアが全世界的な人気を博している。

それらの事情は耳に入っていて、プレイしてみたいという衝動に駆られてはいたが、この二年で周りに遅れを取った事は多く、それらを片付ける前にプレイする事は出来なかった。

だがしかし、今回は例外だ。

なぜなら、それはあの世界で共に生きた、共に命を預け合った本物の関係を前には簡単に崩れ去るからだ。

必要ならば共に行こう。未だ囚われ続けているならば俺は必ず助けに行こう。唯一俺が信頼出来る存在なのだから。

「その中にアスナはいるんだな」

「ああ。恐らくとしか言えんがな」

「いいさ。同じ血盟騎士団副団長として、そして友人として、俺は助けに行くよ。あいつが何処にいても、な」

勿論、エギルも同じだからな。

そう言つて店を出た葵。

時間帯の事もあり、葵が店を出た今、エギル一人となつた店内には静寂が訪れた。

そんな中、エギルは感心と共に嬉しさを感じていた。

「…お前は本当に面白くて真つ直ぐな奴だよ、葵」

帰宅した後、俺はまたメールが届いている事に気づく。

宛先人の名は、キリトだった。

内容は大体予想できるが、一応開く事にした。

内容はやはりアスナの事であり、俺に力を貸してくれといった用件で、もし協力してくれるのなら数時間後、その世界にある世界樹の近くで会おうとの事だった。元よりそのつもりだった俺は即座に準備を済ませ、二ヶ月ぶりに仮想世界へと旅立つ。

「リンクスタート」

現実世界の体から仮想世界への体へと変化する刹那を、俺は懐かしんでいた。

ソートアートオンラインあの世界に二年も囚われ、生死を賭けた戦いを続けたにも関わらず、俺は何処かあの世界を憎み切れないのだと思う。勿論、彼のした事は犯罪であり、多くの人の命を奪つたことに違いはない。だが、仮想世界自体に罪はない。それに彼が想い焦がれる気持ちもわからないくもないのだから。

「……つと、種族設定か」

種族は合計九種類だ。

サラマンダー火妖精族、ウンデイルネ水妖精族、シルフ風妖精族、ノイム土妖精族、インプ闇妖精族、スプリガン影妖精族、ケットシー猫妖精族、レブラコーン工匠妖精族、プーカ音楽妖精族。

これだけ種類があれば、迷うのは当たり前だろう。

だが、サラマンダーやノーム、シルフはプレイスタイルに合わない種族なので却下とした。

回復力はあまり必要ないのでウンディーネも却下。

プレイスタイル的にはスプリガンかインプが合っていると感じたが、スプリガンはキリトを連想させるので止め、インプに決定した。

その後、細やかな設定を終え、新たな世界へアルザハイムと入場する。

「ここはどこだ?」

俺が初めて降り立った場所は、当然見知らぬ地だった。

辺りの建物や人々の装備にはすべて紫が主に使われていた。状況から察するにここは闇妖精族の領地といったところだろう。

だとすれば話が早い。まずウィンドウを開き、ユルドーこの世界の硬貨ーがあるかを確認する。1000ユルドと書かれた欄があり、それを確認すると、俺は酒場へと足を運ぶ。

軽快なりズムを奏でる店内の音楽を背景に、昼過ぎだというのに騒ぎ、踊り、話す多くのプレイヤーがいた。

その中で、カウンター席にいる二人で何かを食べているプレイヤー達に声をかける。

「すまん、少し聞きたいんだが」

「はい、なんでしょう」

「ああ、この二人に何か飲み物を出してやってくれ」

NPCの少女にそう告げ、話を始める。

「実は今さつきログインしたところでき、このゲームの事を知らないんだ。よかったら教えてくれないか」

「ええ、大丈夫ですよ」

「お兄さんは何が知りたいの?」

具体的な内容を問う少女は先程の少女と比べると、割と幼いという

印象を与えた。

先程の少女は大人びていて、落ち着いた雰囲気纏っていた。そんな少女達に、俺は今回の目的を簡潔に話す。

「世界樹の上に行きたいんだ」

こちらを不思議な物を見るかのように眺める二人。俺が冗談を言っている訳ではない事がわかると、やがて口を開き始めた。

「……それは恐らく全プレイヤーが思っている事といえますか、それがこのゲームのグラウンド・クエストなんです」

「……なるほど。それをクリアするとどうなるんだ？」

「滞空制限が無くなるんだよ！世界樹の上にある都市に到達すると《妖精王オベイロン》に会うことが出来て、その上その種族は《アルフ》っていう高位種族に生まれ変わるんだ！」

そう言っただけ嬉しそうに、はしやぎながら語る少女を慣れた手つきでなだめるもう一人の少女。彼女達を見ていると、自然と笑みがこぼれる。

現実世界では姉妹なのだろうか。

「そりゃいいな。上に行く方法は判明してるのか？」

「はい。世界樹の内部を登るのですが、上への道を守っているNPCのガーディアンが強過ぎるんです」

「へえ…そんなに強いのか。ありがとう、取りあえず世界樹の前まで行ってみることにするよ」

笑顔で一言礼を告げ、立ち上がる。

そして出口へと体を向ける。が、しかし体はすぐに元の方向へと向けられることになる。

「……なあ、世界樹ってどっちだ？」

「……」

「あははははっ！お兄さん面白いね！ふふっ……あはははっ」

少女に大笑いされ、少し恥ずかしくなり、頬が赤く染まる。仮想世界の感情表現は大袈裟な物で、少し恥ずかしく感じると顔が赤くなってしまうのだ。

またもや、それを見たもう一人の少女が笑う彼女をなだめる。

そして俺にとって最高に魅力的な提案をしてくれる。

「もしよければ、世界樹まで一緒にしましょうか？」

「本当か!? ありがとう! 俺はヴォルフ、よろしく!」

「あつ、はい……ランって言います。よろしくお願いします……」

「僕はユウキ! よろしくねお兄さん!」

ランは先程の俺のように、いや俺より頬を赤く染めていた。俺は少し遅れてそれを認識し、数秒後、自分が何をしているのか気づき、咄嗟に手を離す。

「っ! 悪い!」

「い、いえ……大丈夫です。…じゃあ、行きましょうか」

「ああ」

「冒険ってわくわくするよね!」

ここから三人の闇妖精の冒険が始まる。

初めての飛行

世界樹への旅、すなわち冒険を始める前に、会得しなければならぬ技術があった。

それはコントローラーなしで空を飛ぶ、随意飛行という技術だ。

別に随意飛行が出来なくとも構わないらしいのだが、強くなる為には随意飛行を可能にする事から始めなければならぬらしい。なぜならALLO内で活躍するプレイヤーの中に随意飛行が出来ないという者がいないからだ。

すなわちこの世界で戦うということは、必然的に随意飛行を会得しなければならぬという事になる。

「コツとしては肩甲骨の辺りを意識することですね」

「……肩甲骨を意識？」

まずはコントローラーから飛行を始めてみるのが基本なのだが、コントローラーなしでもすぐに出来ると思っていた俺は随意飛行というものを少し侮っていたようだ。

ランが細かいところまで説明してくれるのだが、元より感覚派の俺は彼女の説明を聞いても中々上手く行かない。

するとそれを察したユウキが、周りが聞けば全く理解出来ないアドバイスをしてくれる。

「うーんとね、こう、グツときてギューンって感じだよ！」

「ユウキ……」

効果音を口に出しながら、飛行をするユウキ。それを呆れた顔でランが見ているが、飛行しているところを見せてくれるというのは俺的にありがたかった。

「……こうか」

先程ユウキがしたように、背中羽を少しずつ動かしていく。

そしてついに足が地面を離れ、少し体が宙に浮く。

初めての感覚に戸惑うが、少しずつ慣らし、戸惑いを無くしていく。

そして少しずつ、高度を上げながら動き、辺りを一周する。

これは癖になる。全プレイヤーが滞空制限を無くしたがる訳がよ

くわかる。

「そうです！直ぐに出来るなんて…凄いですよ！」

「そ、そうかな」

素直な賞賛に少し頬を赤く染める。

ユウキは未だに上空を飛んでいて、何かをこちらに向かつて叫んでいる。

「早く行こうよ！ヴォルフ！姉ちゃん！」

「全くもう……」

「くくつ、元気だな………ん？姉ちゃん……？」

ユウキの無邪気な笑顔を見ると自然に笑みがこぼれ、流しかけたが、確かにユウキが言った。ランのことを姉ちゃん、と。

つい聞き返してしまうが、ここでは現実リアルの事情の詮索はマナー違反だという事を思い出す。

「…ああ、悪い。マナー違反だな」

「いえ、大丈夫です。実は私達、姉妹なんです」

「へえ…」

「あれ、反応薄いですね」

ランは意外そうな顔で驚いていた。

薄々感じていたからか、自分でも驚くほどに反応が薄くなった。

やはり姉妹だった。ユウキをなだめるランの姿が長年付き添った者の雰囲気醸し出していたので、もしかしたら、とは思っていた。

「元気で可愛い妹だな」

「……ええ。本当に元気、なんですよ」

返答に少しの間があり、ヴォルフは怪訝そうにランを見る。ランは何処か思い詰めた表情をしていた。

現実世界でも知り合いだったならば、どうしたのか聞いただろう。だが、ここは本当の肉体を持たない世界だ。そんな世界で知り合ったばかりの俺は彼女の相談相手になる資格も、立場も持ち合わせていない。

会話がいきなり終わり、沈黙に包まれたこの状況をどうしたものかと考えていると、空を飛んでいたユウキが猛スピードでこちらへ下降

して来る。

「もう！何やってるのき二人共！早く行こうよ」

「あ、ああ。そうだな。じゃあ改めて頼むよユウキ、ラン」

「はい、頼まりました」

微笑むような笑顔の彼女は了承の意を表明した。

「じゃあ行こう！」

ユウキは掛け声と共に飛行を開始した。それに着いて行く様に俺とランも続く。

闇妖精族の領地付近の森の上を飛びながら、世界樹へと向かう。

飛行を開始して数分すると、領地とはかなり離れ、森を抜けた。

このままずっと飛んでいきたいが、滞空制限がある為、一度下へと降り、少ししてからもう一度飛行を開始する。

すると高度を上げた所でモンスターと遭遇した。

モンスターの名前は《イビルグランサー》。数は三体であり、割と多めだ。イビルグランサーは羽の生えた大きいトカゲの様な体をしており、色は紫。ランによると中々強いモンスターで初期装備ではまず勝てないと言っていた。だが、三人で三体相手をすると考えれば、一人一体だ。多少強くとも、勝てる筈だ。

なぜなら過去にはこれよりもずっと理不尽な場面が何度もあったのだから。

それだけではないこの世界は浮遊城《アルサ Heim》^{アルサ Heim}《アインクラッド》が存在する世界とは違い、数字だけで全てが決まる世界ではなく、反射神経や運動能力といった現実でのプレイヤーの能力が関係してくるプレイヤースキル依存型VRMMOだ。

それらを踏まえて、俺は勝てるかと確信している。

「二人一体、それでいいか？」

「えっ、初期装備じゃ勝てないと思いますよ…?」

「まあ、無理そうだったら助けてくれ」

そう言っただけなら都合良く三方向に散らばり始めたイビルグランサーの所へと向かう。

すると三体の内、一番右側のイビルグランサーが俺の存在に気づき、猛スピード近づいて来る。

まずは向かってくる敵を軽くあしらひ、相手の速さと攻撃力を確かめる。

「やっぱり大したことないな」

実際に剣で流してみると、速さも力も予想より下回っていた。

やはり前の世界とは比べ物にならない。死んでも構わない世界でこの難易度はいささか低すぎるのではないだろうか。

躲されたイビルグランサーは進行方向を一瞬で真逆に変え、もう一度こちらへ飛んで来る。

今度は躲さず、受け止める。

「ふっ…い」

そして腹部を数回斬りつけ、敵が体勢を立て直す前に離脱する。

防御も予想より脆く、一撃で目に見える程ヒットポイントが削れた。

そこで周りを見ると、ランとユウキは既に戦闘を終え、こちらへと向かって来ていた。

「じゃあ、こっちに来る前に片付けますか」

今度はこちらから。と言わんばかりの速さでイビルグランサーとの距離を縮め、先程とは比べ物にならない程、力を込めて斬りつける。するとヒットポイントはどんどん削れて行き、十数秒で削り切った。その後、イビルグランサーは直ぐに青色のポリゴン片へと姿を変え、消滅した。

「こんなもんか。やっぱり二ヶ月も動かしてないと鈍るよなあ…」

そう呟きながら、二人の方を向くと、二人は同じ表情でこちらを見ていた。

その表情は信じられないといった様な物で、正常に動き出すまで時

間が掛かった。

「え、えっと…強いね！ヴォルフは…」

「…どうやってあの装備で…？」

若干引かれていた。

流石初期装備といった強さなので、実際かなり性能は低い。
アインクラッド
前の世界で使っていた装備が恋しいほどに。だがしかし、言って仕舞えばあんな物は工夫でどうにかなるレベルだ。

先程の戦闘を見れば、ユウキもランも規格外の強さを誇っている事がわかる。闇妖精族でも高い立場にあるのだろう。なのでそこまで引く要素も無い筈なのだが。

「…そんなに驚くことか？」

「は、はい…。少なくとも私は見たことがありません…。初期装備でイビルグランサーを倒すプレイヤーなんて」

「ん…？ならどうして装備を買う前に領地の外に出たんだ？」

「本当は少し飛ぶ感覚に慣れたら、一番弱い敵を倒してから装備を買う予定だったんだけど…その必要は無いみたいだね」

彼女達は世界樹までの道のり、俺のALOプレイヤーとしての始まりの道筋をよく考えていてくれていたようだ。

しかし、俺はそれら全てを台無しにしてしまったのだ。そう思うと少し申し訳なくなる。

「強くて損はしないからね！」

「そうですね、これなら世界樹に早く辿り着けます」

「…おう。じゃあ引き続き案内をよろしく頼む」

「はい」

「うん！」

彼らの冒険はまだ始まったばかりだ。